

哲學研究

第六十七號

第十六卷

カントに於ける認識客觀性の問題

岡野留次郎

„— der Verstand schließt seine Gesetze (a priori) nicht aus der Natur, sondern schreibt sie dieser vor.“

(Prolegomena, S. 102)

一

凡そ一切の認識が個人的の吾等のものとして現はれる限り認識の問題が提起せられるとすれば、認識論が如何なる出發點を取り如何なる歸結に導かるゝにしても、何等かの意味を此現實的個人的認識に認めなければならぬ。如何にして時間空間的に制限されたる現實の個人が時空を超越した普遍妥當的な真理を思考し得るか、こは認識論が如何なる立場を取るに拘はらず説明を與へなければならぬ問題

である。經驗論者の依つて立つ根據は實に此處にある。カントも凡べて我等の認識が經驗と共に始まるは何等の疑のなき所、時間上より言へば如何なる認識も經驗に先ちて吾等の中に生起することなく、凡べて經驗と共に始まる (Kritik, s. 647) と明言して居ることは、一般周知の有名な語句である。只問題は、かるが故に、一切の認識が經驗から悉く生起すると云ひ得るかである。既にプラトールも同一の疑問から出發した。若し一切の認識が經驗からのみ生起するとしたならば認識の普遍妥當性は失はれねばならない。プロタゴラスやヒュームの懷疑論は其當然の歸結と言はなければならぬ。然らばかゝる懷疑論を脱して認識の客觀性の基礎付けを如何なる方途に求むべきか。カントは其第一步を吾等の現實に有する認識作用の中に存する先天的要素 (apriorische Elemente) の發見に進めた。之彼が形而上的解明 (metaphysische Erörterung) と名けて居るもの (Kritik, s. 51) 余はクンツェの言葉を借りて形而上的演繹 (metaphysische Deduktion) と呼びたす。 (Kunzke, Kritische Lehre von der Objektivität, s. 86 ff.)

普通の經驗心理學的の見方からすれば先づ外物が存し其刺戟によつて精神現象が生起すると見る。即感覺或は感情の如き心的要素が刺戟によつて解發せられ、種

々に結合して複雑なる意識現象を生ずると見るのであるから、認識作用の如きも、かゝる意識現象の一種と云はなければならぬ。認識作用の心理的説明としては、これは當然であつて時間的發生的に云つて認識作用の如き複雑なる意識現象が單純なる意識現象より遅れて發達し來ることは云ふ迄もない。併しかくの如き見方からは認識の客觀性の説明は出來ない。現實の認識が如何にして生じたかは説明出來ても何故に或認識が眞であり何人も認むべき普遍妥當性を有するかを説明することは出來ない。何者眞なる認識も偽なる認識も心理作用としては區別がないからである。加之、外物とは何か、其刺戟とは奈何、之等の有する意義を一義的に決定しない間は無反省に假定する譯に行かない。併し又現實の認識作用と云ふものを全然離れて純粹に意味とか價值とか云ふものから出發すると云ふ事は認識論を論理的に徹底する所以であるかは知らないが、それ丈認識論全體の問題を偏局せしむる恐れはないかと疑はれる。兎に角カントに於ては現實の認識作用を離れず、しかも其中に普遍妥當的な先天的要素を發見し認識の客觀性を基礎付けんとする所に其認識論の第一歩を進めて居ることは事實である。かゝる立場からすれば先づ第一に認識能力 (Erkenntnisvermögen) の分析から初めなければならぬ。カントに依れ

ばかゝる能力に二つある。即感性と悟性。こは精神の二つの源泉 (zwei Grundquellen des Gemüthes) である。前者は印象を受容するもの後者は印象を對象に統一するもの、換言すれば一は對象の *Gegebenheit* の原理であり他は其 *Gedachwerden* の原理である。認識の可能なる爲には此二つの能力の協力が必要である。吾等の認識作用にかくの如き根本的に其性質を異にした二方向を認むることは既にプラトーンに於て明に現はれて居ることである (*Dialogues, Theaetetus*)。只々感覺的印象のみに依つて一切の認識が成立すると云ふことは客觀性の破滅に導く。

認識能力の中に自發性を認むることに依つて認識客觀性確立の一步が踏み出される。何者若し認識の基く一切の根據が感覺的印象に過ぎないとすれば、不斷の變化たるかゝる感覺的印象の結合の中に普遍必然的の客觀性が立せられる筈がないからである。併し乍ら同時に又極端な論理主義の立場を取るのぞなければ何等かの意味で認識の質料的要素の認識論に於ける意義を認めなければならぬ。少くともカントに於ては認識の質料的方面と形式的方面とは認識成立の二大條件である。即ち對象は少くとも感性を通じて與へられなければならない。併し與へられたのみでは未だ嚴密な意味では對象とは云ひ得ない。次ぎに悟性に依つて考へら

れなければならぬ。かくして初めて對象は認識の對象として存立する。併し若しそうならば認識の對象を構成する質料は一體如何にして又何處より來るのであるか。若し之を外物或は一般に認識の對象から來るとすれば、之程分らないことはない。何者、其對象其物が既にかゝる質料を假定して成立するものだからである。だから若しかゝる質料の依つて基く根據を定立する爲には其存在の仕方其性質等に就て全然不可認識ではあるが感性を通じて認識の質料を與ふる根據として物自體 (Ding an sich) が想定せられねばならない。そしてかゝる想定がカント認識論の立場に取つて誠に都合のよい他の想定に導く。それは認識の對象界は物自體の世界ではなくして現象の世界であると云ふ事實である。若し物自體の世界が認識の眞偽を決する最終の根據だとすれば物自體の認識が感性的直觀を通じての外不可能である限り、感性的印象が認識客觀性の唯一の保證となり、従つてそれは客觀性の破壊と同じ意味になる。之に反して認識對象界が現象界であると考へるならば、かゝる對象界成立の根據を他の認識能力に基けることが出來従つて認識の客觀性確立の途が發見せられる譯である。そこで問題はかゝる現象界が認識對象の世界として普遍妥當の意味を有する根據如何、即ち現象の世界が物自體の世界ではないと

しても、單なる假相虛無幻影の世界ではなく、感性的にして理性的なる吾等に取つて唯一の實在の世界であると云ふ根據は何處に求めらるべきか、先づそれが爲には認識其物の本質を探求しなければならぬ。

吾等の認識は既に述べたやうに感性と悟性の協力に依つて成立する。感性が對象と關係する仕方を直觀と名け、之れに依つて解發せらるゝ限り、對象の表象能力に對する影響を感覺と名け、感覺に依つて對象と關係する直觀を経験的直觀と呼ぶ。(Kritik. s. 48)° カントは此處で對象 (Gegenstand) と云ふ文字を使つて居るのであるが、

一體之は何を意味するのであるか。對象が外物を意味し外物が吾等の心 (Gemüth) に對して與ふる影響が感覺であると云ふ意味に解し、かゝる感覺が認識の質料を供給し、形式が之に加つて認識對象界を構成すると云ふ考に對しては、個人心理學的立場と認識論的立場とを混淆するものであり、従つて到底許すべからざるものであるとするならば——そして對象を斯様な意味に解することは、カント自身の明言する所とも矛盾する——認識の質料因として物自體を想定しなければならぬ。カントに於ける物自體の問題はヤコビが既に「物自體の假定なしには何人もカントの體系に入る事能はず又此假定を以てしては何人も其内に止まること能はず」と云つたやうに

或意味に於てカント哲學の α であり ω であつて、既に餘蘊なき迄に論じ盡された古い問題であると共に、又絶えず新なる思索の源泉となるものであつて、苟もカント認識論の研究に於ては不可避の概念である。

カントに於て物自體が想定せられなければならなかつた *Denkmotiv* は既に述べたやうに、認識對象の世界を現象の世界と見、其存立の根據を我に基かしめんとするコペルニクスの轉回にあつた。我等の直觀が對象が在るが儘に表象するものとすれば一切の認識は其普遍性を失ふが故に、認識が對象に適合する所謂模寫說の立場を去つて、對象が認識に適合する批判的立脚地を取つたのである (Kritik, s. 18; Prolegomena, s. 59) 對象が物自體でなく現象 (Erscheinungen) であるとするれば „etwas, was da scheint“ (K. s. 23) を豫想する。こは不可認識であつて、其性質等に就いて何等積極的の規定を與へ得ないものであるが Gegenstände an sich selbst, Sachen an sich selbst. として Gegenstände der Sinne 或は Sachen 或は bloße Vorstellungen unserer Sinnlichkeit の wahren Correlatum (K. s. 57) である。物自體が我等の感性を離れて果して如何なる性質を有するものであるかは全然不可知であつて、與へられたる唯一の對象は只現象であり、之を如何に明に認識するも遂に物自體の認識に近づく事は出來ない。—was die Gegen-

stünde an sich selbst : ein mögen, würde uns durch die aufgekürteste Erkenntnis der Erscheinung derselben, die uns allein gegeben ist, doch niemals bekannt werden (N. s. 67) かく物自體は吾等に取つては全然不可認識ではあるが、現象の根底に於けるものとして、認識の質料因でなければならぬ。カントが果して物自體を感性の解發因として認めたら何うかはカント認識論全體の上から考案しなければ當を得た判断を下し得ないこと、思はれる。少くとも先驗感覺論に於ては明瞭にかく斷定すべき章句を見出し得ない。

Die Wirkung eines Gegenstandes auf die Vorstellungsfähigkeit, so fern wir von demselben affiziert werden, ist Empfindung. (s. 48) と云ふ文句はかく斷定せしむべき材料としては薄弱である。併しカントは他の場所に於て、感性對象の根底に物自體の存すること及び此 *mit* Kantens Etwas に依つて吾々の感性が解發せられ現象界の現するを明瞭に語つてゐる所を見れば、(Prolegomena, s. 95) 解發因としての物自體の解釋は必ずしも全然カントの本意に背くものとは考へられない。併し乍らかく考へられたる質料因としての物自體の想定は、カント哲學に於ける不整合不徹底の分として、舊形而上學の殘留物として、カント以後の哲學の一切に批難する所であり、殊に現代論理派の等しく排斥し去る所であることは云ふ迄もない。不可認識なる物自體が感性解發の原

因となり、現象の根底に存在することは、先驗論理學の歸結の到底許さざる所である併し、夫にも拘らずカントが自體を想定せずに居られなかつた *Denkmödy* は、明に認識の質料に關しての考慮である。かゝる考慮は果して現代論理派の人々の主張する如く、しかし無意味なものであらうか。カントが認識成立の原理として、對象が直觀を通じて與へられねばならないと主張する所に認識の質料の認識論上に占むる否むことの出来ない地位を有力に語るものではあるまいか。プラトリーのイデアは個物の知覺が因となつて回憶せられる。個物の知覺はイデア回憶の因として、併し、全然現象としての認識對象構成に與るの權能ないものであらうか。併し一切が現象であり、意識内容であり、之等を超越した夫自身に存立した實在界を想定することが所詮論理的矛盾である限り、之を質料因として認むることは出来ない。一體物が外界に存在するとか、其物に感性が解發せられて認識の材料が得られるとか云ふが如き考方は個人心理學の見方であつて、カントが對象が與へられるとか、物自體が感性を解發するとか云つて居るのは全くかゝる素朴的な心理主義的見解を脱しない所から生じた矛盾であるとも解せられるであらう。勿論かくの如き論理派の主張に對してカントの先驗感覺論を辯護すべき何等の武器を持つて居ない。凡そ物が與

へられると云ふことすらが所與の範疇の如きものに依つて成立するものと考へられねばならないであらう。夫にも拘らず余が先にカントが個人心理的の現實の認識作用から出發したと云ふ事と或意義を認めた所以は全く認識の質料に對する考慮と及び認識作用に對する考案が認識論上等閑に附すべからざる重大問題と思惟したからである。勿論個人心理學的の立脚地が價值批判的立脚地の前に崩壊すべきは云ふ迄もない。外物とか個人とか之等の想定が認識論上許すべからざる素朴性を包含するとは明なことであるが、かゝる立場が認識作用に對する考慮の切要を暗示することに依つて先驗心理學的或は現象學的立脚地の認識論上缺くべからざる所以を指示する點に於て、其見逃がすことの出来ない旨趣を認めんとするものである。最も直接的なものは先概念的、不可言的のものだとしても概念的なものゝ根源として認めなければならず、又之を認むることに依つて初めて認識作用、認識の質料價值と現實在の關係等の問題が明に解決し得らるゝのではあるまいか。カントが物自體なる概念を以て現はさんとした深き意義は、かく解して初めて明となると思はれる。勿論かく解するはカント認識論の批評或は發展であつて、其忠實な解釋ではない。

之を要するにカントが認識客觀性の基礎付けに於て先づ第一になさんとしたのは認識の形而上的演繹であり、こは認識作用の先驗心理學的或は現象學的分析の素朴的な *Verfahrungsweise* であつて、認識論に於ける不可缺の一部門と思はれる。こゝに於て問題となるは感覺とは何か、感性とは何か、外物とは何か、感性が對象によつて解發せられ其影響を受けるとは如何なる意味か、換言すれば個人心理的に感覺の有する意義を認識論的に規定することも出來やう。

又悟性とは如何、感性と悟性との區別も明にせられ、純粹直觀、感性的直觀、直觀形式たる時空、悟性形式たる範疇の發見及其解明がなされ、其先驗性の意義が闡明せられる。

今恚う云ふ立場から前に問題とした表象能力に解發的影響を及す限りの對象とはなにを意味するかを考へて見やう。こは *Gegenstand* であつて *Gegenstand an sich* はない。對象が先づ存在して、表象能力を解發し其影響が感覺であると云ふことは云ふ迄もなく經驗心理學的の見方である。之は更に認識論的に精密に規定せられなければならぬ。併し此見方は直に認識論的立脚地と矛盾するものとして排斥することは出來ないと思はれる。此場合の對象とは物自體ではなくして、現象と解

せねばならない。固より現象が認識の對象として、外界に或は内界に存在するものとして、立せらるゝ爲には既に先驗論理學の歸結を豫想するものであり、従つて悟性作用が論理的に先行すると考へなければならぬであらう。併し乍ら又他方から考へれば意識から「私」と云ふ附加物を取り去つて終ふならばリッケルトも云ふ様に凡べてが意識内容とならなければならぬ。否更に進んで考へれば最も直接的な意識は内容と對象とかの區別を絶したものと考へられるであらう。斯様な具體的なフュールの所謂現象 (Phänomen) としての意識の分析と云ふ立場から見れば先づ外界内界に對象を立すると云ふのではなくて抑も外界と内界とかの區別、對象の意義、其解發とは如何なる意味か感覺とは奈何、又認識の質料とは何を意味するか等が闡明せられることが此場合の問題であると考へられねばならぬ。換言すれば對象が感性を解發して感覺を生起せしむると云ふ經驗心理學の見方を改めて、意識の具象的直觀作用の中に、對象の所與性が立せられ、對象に解發せられるものとしての經驗的我が立せられると考へ得られないであらうか。かく見ることは必ずしも全然カントの眞意を遠かるものとも思はれない。何者、現象は、カントに依れば、我々に與へられたる唯一の對象であり (K. s. 122) 此現象は Gegenstände unserer Sinne

(K. s. 61) 或は Gegenstände der Sinne (K. s. 75. 80) 或は Gegenstände der Sinnlichkeit (K. s. 55) であつて、現象は其限りに於て unbestimmter Gegenstand der empirischen Anschauung (K. s. 48) であるからである。即ち具體的直觀作用の中に主として認識の雜多性、個々性、質料的所與性が定立せられ、對象はわが感性に與へられたる對象として、其觸發因として、不確實にはあるが其對象性が規定せられる。かく解することに依つてカントが感覺の對象として立した所の (Hologonema, s. 90) 認識の質料の依つて基く根據を形而上的實體としての物自體に見出す如き非理を避け、先驗心理的に基礎付けることが出來、カントが形而上學的に物自體が感性を解發すると考へたり、或は經驗心理學的に一般に對象が表象能力を解發すると考へる所の思惟動機を矛盾なく解決し得るではあるまいか。凡そ意識を「我」意識作用と考へる獨斷的見地を捨て、最も具體的な直接的な意識其者の純眞立場に立つて、其分析を試みるならば具體的個々者を意識する直觀作用と、抽象的普遍者を意識する悟性作用とが先づ第一に意識の二個の全然異つた方向として區別せられる。カントが先づ感性と悟性とを區別し、直觀作用と概念作用との峻別から出發したと云ふことには深き意義あることと思はれる。

—

然るに既に述べたやうにカントが認識客觀性の基礎付けに於て取つた第一歩は、余の解釋に従へば認識作用の分析に依つて先天的要素を發見するにある。此に於て余は先づカントの先天的 (a priori) の意味を考へて見なければならぬ。先天的とは言ふ迄もなく後天的 (a posteriori) に對する言葉であつて、經驗より獨立であり、感覺の有ゆる印象より獨立であると云ふ意味である。此處にカントが經驗と云つて居るのは個人心理的の意味であるは云ふ迄もない。即ち外界及内界に先づ對象が存在して、個人意識の上に影響を及し其結果成立するものであつて後天的と云ふも此意味である。我の意識作用としての感覺を通して一般に對象が與へられる場合後天的の經驗は成立つ。然るに斯様な經驗に現はれて來る對象は、必ず或一定の時間空間の中に存在するか或は單に時間の中に存在する。今時間空間に制限せられる我的感覺作用を通じて現はれる限りに於て一般に對象は何等普遍性必然性を持つてゐない。個人的轉變的である。然るに感覺作用の支持者としての我が既に時空の制限内に存する個人であると考へれば、其個人なる經驗を成立せしむる根底

に既に時空が存すると云はねばならぬ。外界の對象も然りである。一般に個人的經驗から私の感覺作用に從屬する一切を捨象すれば、換言すれば先づ對象があり私の意識が之に感觸せられると云ふ個人心理學的の立場を去り、却つてかゝる後天的の經驗其物を成立せしむる認識論的根據として先天的要素を見出すならば、我等は先づ時空を數へなければならぬ。カントが純粹直觀と名くるものは即之である。こは經驗に基かないが故に先天的であつて、又個人的任意的でなく、普遍的必然的である。故にカントも普遍性と必然性を以て先天的認識の確實なる標識と見做して居る。(K. s. 649)

時空が純粹直觀であると云ふカントの詳しい證明には立ち入らない。併し此處に問題となるのは、私の感覺作用、私の意識作用は時空に制限された個人的の私のものとして既に時空を根底に假定して居ると云はねばならないであらうが、未だ我もなく對象もない純なる意識作用純なる直觀作用に立脚して考察するならば、我も對象も此作用の中に立せられ、對象の我に對する影響としての感覺も作用其物の反省の結果として成立するとも考へられるであらう。かゝる先驗心理學的の立場からして考察するならば時空も經驗成立の先天要素であると同時にカントが内容と名

くるものもかゝる要素として認めねばならないではなからうか。こはカントが物自體と名くるものを直接な純粹な意識作用と解せんとする立場からは當然導き出さるべき歸結であると思はれる。然らばかゝる先驗的要素の論理的本質及其相互の論理的關係如何。そは形而上的演繹の爲すべき職分ではない。此處に於ては只意識の先天的要素の分析解明のみが問題とせられる。換言すれば意識の先驗心理學的分析に依つて意識の二方向を峻別し其相互の特性を明にし其作用の中に存立する先天的要素の解明が形而上的演繹の爲すべき任務である。而して其手引には個人的經驗心理意識が役立つた。我等はかくして具象的直觀作用の中に純粹直觀或は直觀形式と其内容を先天的要素として見出したのである。

於此更に進んで意識の他の一方向即悟性作用の考察に向はねばならない。こは直觀作用が印象の受容作用であるに對して概念の自發作用である。前者に依つて對象は與へられ、後者に依つて對象は考へられる。即直觀作用に於て單に不確實な對象として規定せられたに過ぎないものが悟性作用を俟つて確實なる對象として規定せられるのである。今悟性作用を分析して先天的要素を發見するに當つて、先づ悟性作用の本質を明にせなければならぬ。

此場合にも手引となるのは吾々の現實の悟性作用である。今物體と云ふ表象は直觀を通じて與へられたものと考へられるが、こは時空の形式に依つて統一せられたのみで、未だ充分の規定性を有しないと云ふ意味に於て *unbestimmter Gegenstand* である。然るに悟性は「凡べて物體は分ち得るもの」と考へるとすれば、物體は *Teilbarkeit* なる概念に依つて規定せられ思惟の對象として定立せられたと云へる。此悟性の働は判断の作用であつて、悟性は如何なる場合にも判断の作用となつて現はれるが故に、悟性作用は又概念に依る判断作用とも云へるであらう。即判断作用は直觀作用の如く對象に直接に關係するのではない。却つて直觀作用に依つて一度定立せられた對象に間接に關係するのである。かくして悟性作用の本質が判断作用に存することが明になれば、先天的要素の發見も亦容易である。即經驗的判断作用に從屬する一切の後天的分子を排除するならば、換言すれば判断作用の根本形式を見出すならば、それは經驗に基かず、却つて經驗的判断をして可能ならしむるものとして、それは先天的要素である。かくして見出されたものは即純粹悟性概念としての十二範疇である。今一々之等の詳しき論述には立入らない。

以上我々はカントが認識客觀性の基礎付けに於て取つた第一歩形而上的演繹を

意識作用の分析に依つて先天的要素を發見するにありとし、カントの思想を批評的に開展して來たのであるが、カントの物自體を直接な意識作用と解し、認識の質料をも先天的要素として認めんとする見方の前には多くの難關が横はつて居る。之等の難關を突破し、認識の形式と質料との問題を根本的に解決せんが爲には、我々は更に進んでカントが認識客觀性の基礎付けに於て取つた第二第三の段階に進んで深く考へて見なければならぬ。(未完)

附言、カントの原本はレクナム版に依れり。